今月の1枚

渡良瀬遊水地と筑波山

渡良瀬遊水地は、茨城県古河市の北西に位置し、渡良瀬川、思川（おもい）、巴波川（うずま）の３つの川が流れ込み、約４km下流で日本一大きな利根川に合流している。遊水地の流域は、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県の４県にまたがり、南北約9km、東西約6km、周囲の長さは約30kmで堤防や台地に囲まれており、その広さは3,300ha（東京ドームの約700倍）にも及び、利根川系水系の治水に大きな役割を果たしている。

遊水地の内陸部には国内最大級の面積をもつヨシ原（約1,500ha）を有し、毎年３月下旬にはほぼ全域に渡ってヨシ焼きが行われ、毎年の風物詩となっているほか、生態系保全にも貴重な役割を担っている。貴重な動植物が数多く確認されており、中には国指定の絶滅危惧種の植物60種類、野鳥44種、昆虫23種が生息している。国際的に重要な湿原であることから、2012（平成24）年７月３日にラムサール条約湿地に登録された。

この遊水地計画は、日本における公害問題提起の先駆者として、足尾銅山鉱毒問題に一生を捧げた田中正造の明治天皇直訴を契機に高まった世論に対し、明治政府がとった政策であった。

1890（明治23）年の洪水以後、足尾銅山からの鉱毒が洪水とともに渡良瀬川下流部に何度も流出、氾濫し、広範囲にわたり大きな被害を受け社会問題となった。このため、鉱毒防止対策と利根川・渡良瀬川の治水を目的に、当時370戸、約2,500人が生活していた谷中村を廃村にして遊水地化を行った。渡良瀬遊水地は、こうした人々の犠牲のもとにつくられている。

現在の渡良瀬遊水地には、周囲を堤防で仕切った3つの調節池がつくられ、洪水調節だけでなく、首都圏への都市用水の役割も果たしている。谷中湖（渡良瀬貯水池）がハート形をしているのは、「谷中村遺跡を守る会」が世論に訴え史跡を残そうという運動があり、その結果、偶然そうした形になったといわれている。

水面をわたる風や陽ざしに輝く緑は自然そのもので、さまざまなアウトドア・スポーツに格好の地となっており、家族連れや若者など多くの人々の憩いの場となっている。

◆JR宇都宮線「古河駅」より、約12km・車で約30分
JR宇都宮線「野木駅」より、約14km・車で約30分
東武日光線「新古河駅」より、約10km・車で約25分
東武日光線「柳生駅」より、約1km・自転車で約8分
東北自動車道「佐野藤岡IC」より約16km・車で約30分